

令和 6 年 4 月 29 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00524

研究課題名（和文）クルフ語語源辞典の作成とドラヴィダ語系統樹の再検討

研究課題名（英文）Etymological lexicon of Kurux and reexamination of Dravidian family tree

研究代表者

小林 正人（Kobayashi, Masato）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：90337410

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000 円

研究成果の概要（和文）：インド北部とパキスタンで話される3つの北部ドラヴィダ語族言語、クルフ語、マルト語、ブラフイー語のテキストと語彙を収集し、テキストに語義と訳をつけたコーパスの形で公開し、本としても出版した。また、その語彙集とテキストを元に、ドラヴィダ祖語の比較再建の研究を進め、公刊した論文においては、クルフ語やマルト語独自の特徴とされてきた-k過去などいくつかの活用接辞が、他のドラヴィダ語族言語がもつ別機能の接辞と同源であり、北部ドラヴィダ語族言語のみが共有する改新がほとんど存在しないことを主張した。対象語彙集はまだ出版には至っていないが、引き続き欠けているデータの拡充を続け、出版を目指す。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドラヴィダ語族言語は南インドを中心として分布しているが、どのように話者が現在の場所に居住するようになったかという移動の歴史はいまだ解明されていない。また、ゼロ接辞で否定形を作るなど、典型的に珍しい特徴も持っており、ドラヴィダ祖語を正確に再建することがそれらの解明のカギとなる。我が国においても、日本語タミル語起源説などにより、ドラヴィダ語への関心は高い。本研究はドラヴィダ語族から早期に分化したとされる3つの言語の研究を通してドラヴィダ祖語の再建を見直すものであり、ドラヴィダ語族言語の分化の実態解明を通してこれらの問題にも解決を提案することを目指している。

研究成果の概要（英文）：I collected texts and vocabulary of the three North Dravidian languages spoken in northern India and Pakistan: Kurux, Malto, and Brahui. I published them in the form of a corpus with interlinear glosses and translations, and also as a book. Furthermore, based on this vocabulary and text, I conducted research on the comparative reconstruction of Proto-Dravidian, and in my published papers, I argued that several inflectional affixes, such as the past tense suffix -k, which have been considered unique features of Kurux and Malto, are cognate with affixes serving different functions in other Dravidian languages, and suggested that there are no significant innovations shared exclusively by the North Dravidian languages. The target vocabulary collection has not yet been published, but I continue to expand missing data and aim for its publication.

研究分野：歴史言語学

キーワード：Dravidian languages historical linguistics Kurux language Malto language Brahui language linguistic genealogy

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

インド東部で少数民族オラオン人(約200万人)によって話されるクルフ語(kurux)は、ドラヴィダ語族に属する。バングラデシュ国境地帯で話されるマルト語、パキスタンで話されるブラーフイー語とともにしばしば北ドラヴィダ語派と呼ばれ、ドラヴィダ語族の樹形図モデルでは、ドラヴィダ祖語から最初期に分岐した言語とされている。

ドラヴィダ語の研究は、多くの話者と長い文学伝統をもつインド南部のタミル語、カンナダ語など南ドラヴィダ語派およびテルグ語を中心として行われ、クルフ語を含むインド中部の少数民族言語の言語事実は必ずしも十分に取り入れられていなかった。例えばクルフ語など中部の多くの言語では閉鎖音に有声・無声の対立があるが、タミル文語にこの対立がない事実を重視して、有声子音を祖語に再建しない考え方が優勢である。

しかし近年、クルフ・マルト語が軟口蓋音 *k と口蓋垂音 *q の音素的対立、多種の過去接辞の保持など、ドラヴィダ祖語再建に重要な古形を数多く留めていることが、McAlpin (2003) や小林 (2011) によって指摘されている。ドラヴィダ語族の比較言語学的研究では、Burrow and Emeneau (1984) という優れた語源辞典があるが、中部・北部の少数民族言語に関しては、音形が類似した語を挙げるにとどまっており、十分な比較再建がなされていない。カンナダ語の詳細な語源辞典である Učida & Rajapurohit (2013) でも、カンナダ語内での派生や借用の説明が中心である。クルフ語の歴史音韻論については Pfeiffer (1972) が基本的音対応を明らかにしたが、音規則やその適用条件の解明は緒についたばかりである。動詞の過去語幹からクルフ語がどのドラヴィダ語と親縁関係にあるかを明らかにしようとした小林 (2011) でも、すべての語派との類似点が見いだされ、系統樹の決定に至らなかった。

本研究では、クルフ語がドラヴィダ語族の系統樹のどの節点に位置づけられるのかを解明するため、これまで考察されることの少なかった、クルフ語の単語の内部構造に着目した。クルフ語の語彙を語根と派生接辞に分解し、それぞれの要素を他のドラヴィダ語族言語と比較することで、より精度の高い語源辞典を作成し、クルフ語がドラヴィダ語族の系統樹のどこに位置するのかを再検討することを目指す。

クルフ語の系統関係を明らかにできれば、クルフ語話者がどこからどこを通過して現在の場所に移住したかといった先史を知る手がかりが得られる。インド中部には、系統不明ながらクルフ語と酷似した人称代名詞をもつニハーリー語、南ドラヴィダ語に分類されるがクルフ語に似た過去形を作るコラガ語のように、来歴に謎がある言語があり、クルフ語の先史が明らかになることで、これら来歴不明の言語についても研究の方向性が定まることが期待される。

申請者は、これまでの研究において、クルフ語が多く語彙・文法を借用したインド・アーリア語、過去4世紀以上にわたって濃密に接触してきたムンダ語などオーストロアジア語族言語、およびマルト語など同系のドラヴィダ語族言語の言語記述を行ってきた。クルフ語の現地調査に関しては、ラーンチー大学とドラング大学に所属する母語話者の協力を得て2005年から実施しており、今回も協力の内諾を得ている。インド政府の少数民族優遇策のため、クルフ語研究やその継承のための活動にはコミュニティ全体が前向きであり、理解と協力を得やすい環境にある。申請者自身もクルフ語話者の村に滞在し、話者たちの会合でクルフ語による演説ができる程度の運用能力を養ってきた。語源研究において比較対象となるマルト語も8地点に協力者がおり、ブラーフイー語に関してもリアーカット・アリー博士を介して調査できる。インド・アーリア系のサドリ語、コルワ語についても母語話者の協力者がおり、また今回比較を行うニハーリー語については、日本学術振興会の二国間事業によってデカン大学の Shailendra Mohan 教授と現在基礎語彙集の作成など共同研究の準備作業を行っている。その他の言語、ムンダ語、タミル語、テルグ語などについても、参考書籍を集め、言語学的調査に協力いただける母語話者と知己を得ているので、ほとんどの言語について、円滑に調査を始められる状況である。語源辞典を作成できるだけの新たなデータについては、自身の辞書 (Kobayashi & Tirkey 2017) のデータに加えて、クルフ語の方言形から探す必要があるが、これまで未研究の口ハルダガ方言や、キササン語と呼ばれるオディシャ州のクルフ語方言についても、現地の母語話者の研究者から調査に来るよう招待を受け、訪問している。

2. 研究の目的

ドラヴィダ語族の従来の系統樹では、ブラーフイー語、クルフ語、マルト語は最初に分岐した周辺の語群とされ、祖語再建においてそれらの特徴が真剣に考慮されることは少なかった。例えば軟口蓋音 k と口蓋垂音 q の対立、閉鎖音の有声・無声の対立などは祖語にはない二次的特徴とされてきた。申請者は、クルフ語とマルト語の文法・語彙記述を行う過程で、両言語の特徴がゴンド語などインド中部に分布するドラヴィダ語族言語と特異な一致を示していることに着目し、クルフ・マルト語の語源辞典を作成することで、両言語とドラヴィダ語族他語派との関係を再検討することを目指す。ドラヴィダ祖語は最古の資料であるタミル文語などインド南部の言語に偏重した再建が従来なされてきたが、クルフ・マルト語源辞典の作成とそれに基づく系統樹の再検討によって、中南および中央ドラヴィダ語派諸言語の言語事実をより重視した祖語再建を提示することを目指す。

3. 研究の方法

ドラヴィダ語族の語源辞典である Burrow and Emeneau (1984) では、少しでも同源の可能性のある語を包含する方針から、音形のおおよその一致、特に先頭の子音 + 母音 (+ 子音) の一致をもとに、同源の語として掲載している。そしてドラヴィダ比較言語学では、この語源辞典を所与のものとして言語間の親縁関係を論じることが多い。たとえばクルフ語の場合、この辞典で数えたところ、中央ドラヴィダ語派のパルジ語と 873 語中 221 語 (25.3%)、中南ドラヴィダ語派のゴンド語と 1329 語中 315 語 (23.7%)、南ドラヴィダ語派のコダグ語と 954 語中 217 語 (22.7%) の語彙を共有することになり、どの二言語間にも有意な一致がないことから、いずれの語派とも親縁関係が認められない (Kobayashi and Tirkey 2017:304)。

より厳密に同源語を認定することで、比較研究の精度を高められないかという視点から、本研究では、クルフ語の単語を形成する語根と派生接尾辞や、それらの組み合わせといった語の内部構造を検討して、語根や接辞も含むクルフ語の語源辞典を作り、厳密に同源語の認定を行うことで、クルフ語がどのドラヴィダ語と最も近い親縁関係にあるかを判定することを試みた。これまでのクルフ語語彙の研究では、辞書は主に Grignard (1924) しか使用できなかったが、本研究では自ら作成したクルフ語辞書 (Kobayashi and Tirkey 2017) と、すでに調査したマルト語の対応形を役立てることができる。

言語の系統樹は、A.シュライヒャーによって 19 世紀に導入された古いモデルであり、どの言語形質を重視するかという分析者の主観の入る余地が大きいことや、分岐後の語派間の相互影響を表せないといった欠陥が指摘されてきた。例えば与格接辞 *-ge* を重視した場合、これを共有するクルフ語とカンナダ語が近縁とされ、女性・中性の区別がないことを重視した場合、クルフ語とテルグ語が近縁とされるといった違いが生じる。しかしながら分子生物学において発達した分岐学の計算方法を言語に応用することで、より正確な系統樹が作成できると近年提案されている。本研究では、語根および派生接辞を共有する語を近縁関係の計数可能な指標であると捉え、語源辞典の成果をもとに計算による系統樹の評価を行うことを目標とする。

申請者は過去 10 年以上にわたり、クルフ語話者のコミュニティにおいて調査を続けてきた。その際にクルフ語話者から常に質問されたことは、「いま我々は他のドラヴィダ語話者と離れたところに住んでいるが、我々はどこから、どこを通過してこの地に来たのか?」という問いであった。それに応えて申請者は、クルフ語におけるインド・アーリア系借用語から借用元の言語を調べ (Kobayashi 2009)、ついでクルフ語がドラヴィダ祖語からどう分岐したかについて小林 (2011) で過去語幹に着目して論じたが、決定的な証拠は見つからなかった。さらにクルフ語の全体像を正確に知るため、クルフ語の文法、テキストと 13,000 語の辞書からなる言語記述を Kobayashi & Tirkey (2017) として出版し、またクルフ語に最も近い関係にあるマルト語についても、文法とテキストと語彙集からなる言語記述 Kobayashi (2012) を出版した。

上述の辞書を作る過程で、動詞の先頭 2 つの子音は他のドラヴィダ語と一致するが、3 つめの子音が一貫しない語に多く出会った。これは、単音節の動詞語根に、他語派と異なる接辞がついたものと考えられ、その接辞を研究することで、クルフ語の系統樹への位置づけを決定することができるのではないかと着想した。

申請者が作ったクルフ語辞典には多数の近年の借用語とオノマトペが含まれるので、それら以外の固有語彙と古い借用語の合計およそ 5,000 語について、マルト語の対応語彙をもとにクルフ・マルトの祖型を一旦再建し、ドラヴィダ祖語形からその再建形をもっとも合理的に説明しうる音変化とその相対年代を決定する(なおオノマトペ約 1,000 語の起源の研究についても、二国間事業ですでに着手し、成果の一部を発表している)。そしてその 5,000 語と音変化や形態的特徴を共有する語彙が、ドラヴィダ語族のどの語派に見られるかを数え上げることで、最も近い系統関係にある語派を決定し、その語派とクルフ・マルト祖型の祖型を再建するという作業を繰り返して、ドラヴィダ祖語の最適な系統樹を決定することを目指す。類似する語形を調べるのは手間のかかる作業であり、紙版の辞書やウェブ版の検索インタフェースによる手作業では限界があるため、すでに申請者が Python 言語で作成している各種のデータ抽出スクリプトと語源辞典の電子テキストを用いて作業を最大限に効率化する。そのようにして集めた各言語中の同源語や特徴のリストを数学的モデルによって再検討するため、再建しえた変化を各言語がクルフ・マルト語と共有する度合いの点数化を試みて、系統樹分析ソフトでの評価を試みることを目指した。語形を集めるには、自然談話録音などの言語資料を話者とともに聴きながら質問する形式が効果的だが、現地調査中はそのような作業が難しいので、クルフ語やマルト語の話者を招聘して大学において共同研究することでデータ取得の円滑化を図った。

現在、クルフ語話者は、先住民族であるオーストロアジア語族話者のムンダ人と混住しないしは隣接しているが、これは度重なる移住の結果、現在の場所に居住するようになったものと考えられている。移住の経路を示す歴史的記録はないが、Kobayashi (2009) によってクルフ語中のインド・アーリア系借用語に西部インド・アーリア語由来の語彙があることが指摘されている。また、話者数が 2,000 人に満たない西インドの二ハーリー語は、南アジアのどの語族とも系統関係が確認されない孤立語であるが、基礎語彙にクルフ語との奇妙な一致があることが Kuiper (1966) によって指摘されている。本研究でクルフ語の先史がよりよく理解された段階で、2017 年度から二国間事業を行っているインドの国立中央言語研究所所長であり二ハーリー語専門家である Shailendra Mohan 博士とともに共同研究を行って、二ハーリー語の起源解明の糸口を

探ることを試みた。

4．研究成果

研究期間内に、クルフ語、マルト語、ブラーフイー語の語彙調査は行ったが、クルフ語の語源辞典の完成には至らなかった。ニハーリー語とクルフ語にも明白なつながりは見られなかった。一方で、期間内にクルフ語の起源につながるいくつかの発見ができた。クルフ語の音素、特に語末の -a の歴史的起源について、2021 年の論文で、ドラヴィダ祖語の *-ai にさかのぼる場合と *-a にさかのぼる場合に分かれることを指摘した。また 2022 年の論文では、ドラヴィダ祖語に存在した過去形が、クルフ語では継承されていないものの、マルト語の副動詞の短形に残っている可能性を指摘し、また、本来の過去形は過去 3 人称形のみに残っており、クルフ語とマルト語の 1 人称、2 人称形が動形容詞に由来すると主張し、過去接辞 -k が他のドラヴィダ語族言語にも見られる形容詞接辞と同起源であると主張した。過去接辞 -k は、クルフ語とマルト語、ブラーフイー語の共通の改新とされてきたが、実はクルフ語とマルト語のみで起こった過去動詞形の再編成によって形容詞形が定動詞化したものであり、北ドラヴィダ語派というグループを立てる根拠を否定した。クルフ語とマルト語の過去形の起源については本研究でほぼ解明されたと言える。

クルフ語の研究にはなお資料の充実が必要であるが、研究期間中の 2020 年に Purkhar gahi Xiri というクルフ語の民話集を出版することができた。またブラーフイー語に関しても、700 ページのグロス、英訳つきテキストを完成させ、現在出版の準備中である。これらを含めた 3 言語のデータは、音声とともに東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所のウェブサイト bkm.aa-ken.jp で公開した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 1件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Masato Kobayashi and Liaquat Ali	4. 巻 1
2. 論文標題 Asyndetic Conditionals in Brahui	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 The Oxford Handbook of Dravidian Languages	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/oxfordhdb/9780197610411.001.0001	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Masato Kobayashi	4. 巻 1
2. 論文標題 Proto-Dravidian Origins of the Kurux-Malto Past Stems	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Bhasha: Journal of South Asian Linguistics	6. 最初と最後の頁 263-282
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.30687/bhasha/2785-5953/2022/01/004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Masato Kobayashi	4. 巻 51
2. 論文標題 Origin of the -k past in Kurux and Malto	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 International Journal of Dravidian Linguistics	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masato Kobayashi	4. 巻 81
2. 論文標題 Reconstruction of verb suffixes in Kurux and Malto	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Indian Linguistics	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masato Kobayashi	4. 巻 140
2. 論文標題 Viewing Proto-Dravidian from the Northeast	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of the American Oriental Society	6. 最初と最後の頁 467-481
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.7817/jameroriesoci.140.2.0467	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 小林正人	4. 巻 1
2. 論文標題 クルフ語Expressiveに見られるムンダ語からの影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Toshiki Osada, Mundari Expressive Dictionary	6. 最初と最後の頁 28-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Masato Kobayashi
2. 発表標題 Brahui : What it shares with Kurux and/or Malto,and what it tells about languages
3. 学会等名 Dravidian Linguistic Association Lecture Series (招待講演)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Masato Kobayashi
2. 発表標題 Asyndetic conditionals in Brahui
3. 学会等名 37th South Asia Languages Analysis Roundtable (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1．発表者名 Masato Kobayashi
2．発表標題 Reconstruction of Proto-Kurux-Malto Verbal Bases
3．学会等名 DravLing 4
4．発表年 2022年

1．発表者名 Masato Kobayashi
2．発表標題 Dravidian and the Kurux-Malto -k Past: What outlier languages tell us about reconstruction
3．学会等名 43rd International Conference of Linguistic Society of India (招待講演) (国際学会)
4．発表年 2021年

1．発表者名 小林正人
2．発表標題 ドラヴィダ語族クルフ語・マルト語の不定詞の史的再建
3．学会等名 日本言語学会第159回大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 Shailendra Mohan and Masato Kobayashi
2．発表標題 Dravidian Elements in Nihali
3．学会等名 40th International Conference of the Linguistic Society of India (国際学会)
4．発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1．著者名 Masato Kobayashi and Tetru Oraon	4．発行年 2021年
2．出版社 Kotoba Books	5．総ページ数 196
3．書名 Purkhar gahi Xiri	

1．著者名 Masato KOBAYASHI and Tetru ORAON	4．発行年 2020年
2．出版社 Routledge	5．総ページ数 541
3．書名 The Dravidian Languages (Chapter 17. Kurux)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>ウェブサイト Materials of Dravidian Languages https://bkm.aa-ken.jp</p>

6．研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------